

2021/2/13

(うと Q 世話し それこそ「杞憂である事」を望む事柄)

うろ覚えですが、確か太宰治が

「電車とプラットホームの間に落ちて挟まってしまうのではないかと常に怯えているようなものだった」

と書いてあったのを読んだ記憶があります。

こうした話を耳にすれば、

「滅多にしかあり得ないことを気にし過ぎだ。杞憂だ」

と退けます。

話は変わりますが、これまたうろ覚えなのですが、新聞記者の先輩が新人に「ニュースとは」
或いは「ニュースの見いだし方」の件で、

「猫がネズミを捕ってもニュースにならないが、ネズミが猫を捕ったらニュースになる。滅多に起きない事を探せ」

といったような話を聞いた記憶があります。

同じように滅多に起きないことが、方や「杞憂」として退けられ、方や「希少価値（ネタ）」
として珍重される訳です。

その違いは何か？

と考えるに、人々が、それが自分の身に起こること、或いはそれに臨場する事を望むか
望まないかの違いによって生じているように思われます。

電車に乗り降りするのに、その度に電車とプラットフォームの間に落ちるのではないかと
怯えていたら窮屈で仕方がないので、その「滅諦にない事」を望まず、退ける。

一方、ニュースの方は非日常的で、面白く、人より自分の方が先に知っていたことを多少なりとも自慢できるものとして、その「滅多にない事」を、むしろ積極的に吹聴伝播する、という違いです。

まあ、受け手である自分からすると、この傾向は人情としてはよく分ります。

しかし、送り手側が、このような事ばかりしていると、話は変わってきます。

つまり

「可なり例外的な事を、あたかも普遍的な新事実」として伝えたとなると、又それが何回も、
いや毎回そんな形で伝え続けたとなると、受け手の眼前には「興味津々の願望でしか無いもの
が、あたかも実在する真実」であるかのような「妙な世界」が浮かび上がって見えること
になってしまう可能性があるからです。

之はちょっといけません。まずいでしょう。

いくら受け手に「珍しいことを求める潜在的なニーズがある」からと言って、そんな需要を
満たすことを第一にしたり、それが幾分過ぎて、でっち上げてしまう「ヤラセ」をするよう
なことをしたりすれば、いずれ受け手側も、送り手側も、最後は碌な事にならない様な気が
してなりません。

それこそ、自分はそれが「杞憂である事」を望みます。